

小型ロボット競技大会「BRAVE」に初挑戦!!



ロボット製作を学び始めて約半年の3人が、ロボコンに初挑戦した!

はじめは、月に2回の地元のロボット教室だった。それから約半年、彼らは先生の主催する小型ロボット競技大会「BRAVE」に出場することにした。もちろん、初めてのロボコンだ。さて、その結果は・・・

「ロボマガ」記者・城井田 勝仁



小笠原多喜くんは、お父さんと一緒に、月2回のロボット教室に通っている。

きっかけは、たまたま通りかかった読売・日本文化センター川崎で、「ロボットを創ろう」という講座を目にしたことだ。読売・日本文化センター川崎は、駅ビルの中にあり、その立地条件の良さから、そうした受講者はおそらく少なくないだろう。本誌が教室を訪問したその日も、たまたま受付の前を通りかかったらしい人が多く見られた。

お父さんによると、多喜くんはそのときに「やってみよう」と言ったそうだ。

小学2年生の多喜くんは、まだプラモデル作りも始めていない。でも、ためしにと受講してみると、本人の「やってみ

よう」との言葉通りに、多喜くんはロボット作りが好きな様子を見せたらしい。

お父さんが毎回付き添っているのは、小学2年生である多喜くんが、まだ細かな作業をこなせないからだ。そこで、多喜くんがこなせない作業を、お父さんが代わりに行っているのである。いわば、共同作業で一つのロボットを作っているのだ。

実は、お父さんもロボット作りは初めてだと言う。子ども時代にいわゆるガンブラを作ったことはあるものの、ラジコンのように動くものは未経験だそうだ。だから、多喜くんが率先してロボットを作ることもなく、多喜くんといっしょにロボットを作ることが素直に楽しめているみたいだった。

ロボコンへの参加に関しては、多喜くんを尊重し、「参加することに意義がある」と、一つの経験だと考えているよう

だ。

多喜くんは言葉数が少ないので、なぜロボットに興味を持ち、なぜそれを作ることが好きで、なぜ約半年間も教室通いを飽きることなく続けているのか、その本当のところはわからない。ただ、友達や家族の影響ではないようだ。小学校の低学年ということもあり、友達には同じようにロボットを作る子はまだおらず、工作好きのお父さんがいるわけでもなく、前述したようにお父さんもそうではない。兄弟は幼い妹が一人いるのみということで、家庭環境からくるものではない。

ロボコンへの参加は、そんな多喜くんの新たな一歩である。ロボットの試運転では、初めてとは思えない操縦センスを見せていた多喜くんなので、もしかすると思わぬ活躍してくれるかもしれない。



小学2年生の多喜くんは、まだ手先があまり器用でないことから、お父さんとの共同作業でロボットを作っている。



先生がロボットの状態をチェックしている様子を、真剣に見聞きする多喜くん。自分だけのロボットだから、一時も目を離せないのだ。



一応の完成となったところで、とりあえず動かしてみる。初めてのプロボ操作とは思えないくらい、操縦のうまさを見せる。